ユーモア知覚が過失に対する寛容さに及ぼす影響

○菊地史倫^{1, 2} 佐藤拓¹ 阿部恒之¹(¹ 東北大学大学院文学研究科・² 日本学術振興会)

key words : 社会的潤滑油, 感情調整, コミュニケーション

過失により他者に不利益を与えてしまった状況 (e.g. 寝坊による遅刻) において、相手からの罰 (e.g. 叱責) を避けるために言い訳をすることがある。言い訳の内容によっては相手からゆるしてもらえることもあるが、怒りを激化させてしまい相手から全くゆるしてもらえないこともある。このような状況においてユーモアが用いられることがある。ユーモアは他者のネガティブ感情を抑制し、ポジティブ感情を促進することで葛藤の激化を抑え、その後の良好な関係性を維持する一助となっていることが指摘されている (Martin, 2007)。また、ユーモアが影響を及ぼすのは主にユーモアの受け手の感情であり、ユーモアの内容自体の認知 (e.g. 重大性) にはほとんど影響を及ぼさない (Martin, 2007)。ここから、ユーモアは他者の感情調整により機能する社会的潤滑油の一つとして考えられる。

しかしながらユーモア知覚の個人差は大きいことが指摘されており、常に相手にユーモアが伝わるわけではない (上野, 2003)。自分はユーモアを言ったつもりでも、相手がユーモアとして知覚しなかった場合は、ユーモアによる感情調整が機能せず、葛藤が激化してしまう可能性がある。

そこで、本研究は同一の刺激に対するユーモア知覚が感情調整、過失に対するゆるしと内容の認知に対して、どのような影響を及ぼしているかについて検討した。

方法

実験計画 「ユーモア知覚」(低群・高群) 要因の1要因参加者間計画。

参加者 大学生 291 人 (男性 76 人, 女性 214 人, 不明 1 人)。
シナリオ シナリオを用いた質問紙法を実施した。シナリオは以下の状況を設定した。①サークルの飲み会で友人の A から次の日に遊びに行くことを誘われる。②自分は約束の時間通りにきたが、A が現れないためつらい状況で 30 分待たされる。③遅れてきた A が、ユーモアのある遅刻理由を話す。
手続き シナリオを読んだ後で、ユーモア知覚に関する項目、遅刻理由を聞いたときの感情項目 (ネガティブ・ポジティブ)、過失に対するゆるしを示す項目 (寛容性・制裁行動) と遅刻理由に関する認知項目 (信憑性・重大性・責任の程度) を 6 件法 (0~5) で評定した。

結果

参加者のユーモア知覚の平均評定値は 1.60 ($SD = 1.65$) と低かった。またユーモア知覚の評定値に基づいて、ユーモア知覚低群 (評定値 0~2, $N = 191$, 以下は知覚低群) とユーモア知覚高群 (評定値 3~5, $N = 100$, 以下は知覚高群) に分割した。表 1 に従属変数の平均評定値、標準偏差と大小関係を示した。

遅刻理由を聞いたときのネガティブ感情について実験計画に基づく分散分析を行ったところ、ユーモア知覚の主効果が有意だった ($F(1, 289) = 83.21, p < .001$)。知覚低群よりも知覚高群の方が、遅刻理由を聞いたときのネガティブ感情を低く評価した。

遅刻理由を聞いたときのポジティブ感情について実験計画に基づく分散分析を行ったところ、ユーモア知覚の主効果が有意だった ($F(1, 289) = 337.01, p < .001$)。知覚低群よりも知覚高群の方が、遅刻理由を聞いたときのポジティブ感情を高く評価した。

遅刻に対するゆるし (寛容性・制裁行動) について実験計画に基づく分散分析を行ったところ、ユーモア知覚の主効果が有意だった ($F(1, 289) = 54.18, p < .001$; $F(1, 289) = 23.03, p < .001$)。知覚低群よりも知覚高群の方が、遅刻に対する寛容性を高く評価し、制裁行動をしないと評価した。

遅刻理由の認知項目 (信憑性・重大性・責任の程度) について実験計画に基づく分散分析を行ったところ、有意な効果は得られなかった ($F(1, 289) = 2.20, n.s.$; $F(1, 289) = .10, n.s.$; $F(1, 289) = 1.40, n.s.$)。

また遅刻に対するゆるし (寛容性・制裁行動) と感情項目・認知項目の関連性を検討するために、それぞれの相関係数を算出した。その結果、ポジティブ感情は寛容性に強い正の相関 ($r = .59$)、制裁行動に弱い負の相関 ($r = -.34$) が見られた。またネガティブ感情は寛容性に強い負の相関 ($r = -.64$)、制裁行動に強い正の相関 ($r = .64$) が見られた。また責任の程度と寛容性に弱い負の相関 ($r = -.21$)、制裁行動に弱い正の相関 ($r = .24$) が見られた。

表1 ユーモア知覚別の平均評定値 (標準偏差)

従属変数	ユーモア知覚	
	低群	高群
ネガティブ感情	4.17 (0.93)	> 3.01 (1.21)
ポジティブ感情	0.48 (0.81)	< 2.84 (1.38)
寛容さ	1.49 (1.19)	< 2.61 (1.30)
制裁行動	3.10 (1.31)	> 2.34 (1.22)
信憑性	1.41 (1.63)	— 1.13 (1.45)
重大性	0.44 (0.89)	— 0.41 (0.71)
責任の程度	4.71 (0.58)	— 4.62 (0.60)

注: 大小記号は $p < .001$ の差を、— は有意な差なしを示す。

考察

本研究の結果から、遅刻理由にユーモアを知覚した人ほど、ネガティブ感情の抑制とポジティブ感情の促進が見られ、遅刻に対して寛容性が高く、制裁行動もしないと考えていた。そのため、同一の刺激であってもユーモア知覚によって過失に対するゆるしが異なることが示された。また先行研究と同様にユーモア知覚は、ユーモアの内容に関する認知に影響を及ぼさないことが示された。さらに、ユーモアを聞いたときの感情項目と遅刻に対するゆるしに強い相関が見られたことから、ユーモアは他者の認知を変容させることで機能するのではなく、他者の感情を調整することにより機能する社会的潤滑油であることが示唆された。

(Fumitoshi KIKUCHI, Taku SATO, Tsuneyuki ABE)